令和３年～４年度 新潟県・新潟市小学校教育研究会指定研究（２年次）
体育科授業研究会　活動記録

１　基本情報

⑴ 研究主題：「みんなの言葉」でつながる子ども
　　－「いま・ここ」の子どもたちとつくる体育科学習－
⑵ 教　　科：体育科
⑶ 期　　日：令和４年１１月２日（水）
⑷ 会　　場：十日町市立十日町小学校
　　※十日町市・津南町内参加者は現地公開、他はオンライン公開

２　研究の概要

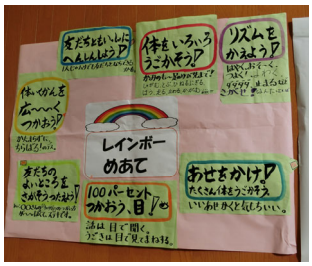
本研究では、子どもが協働的な学びを進める際に用いる言葉を「みんなの言葉」と定義した。また、本研究における「みんなの言葉」は、言語に留まらず、オノマトペ、絵や図、ジェスチャーなど、コミュニケーションが成立する多様な媒体を指す。

研究主題にある「つながる」とは、「みんなの言葉」を媒体として、学びをつくっていく営みを示す。子ども一人一人が「伝えたい思い」と「知りたい思い」が叶えられる互恵関係から、互いの心と心も「つながる」ことを目指した。また、副題にある「いま・ここ」とは、その授業時の子ども一人一人の知識や技能等の課題や、その時の思いや感情等も含めた状況を象徴する言葉である。体育授業に参加する子どもは、必ずしも専門的にその運動に取り組んでいるわけではない。運動に対する興味・関心、身に付いている感覚等に差異がある子どもたちが集まった実践共同体である。そうした子どもたちに、多様なかかわり方（参加の仕方）を保障することで、「いま・ここ」の子どもたちと共に、運動を通して学びを深め、それぞれが運動の楽しさを見付けることを目指した。

１年次の授業研究では、ボール運動やゲーム等の「集団的運動（関係づくりの運動）」の実践が多く提案された。「試しのゲーム」から、より子どもが納得して取り組めるルールが「みんなの言葉」として発せられ、それらを基にした「みんなのゲーム」が生まれた。それにより、子どもたちがより意欲をもってゲームに参加することができた。また、思考を整理する図やタブレット端末の動画撮影機能を活用することで、自分たちの動きを客観視したり、実際の様子を顕在化させたりすることで、チームで共有しやすい「みんなの言葉」を引き出すことができた。

一方で、子どもの思考や技能の変化の見取り、話合いの教師介入の度合いが難しく、課題となった。また、「個人的運動（動きづくりの運動）」に焦点化した実践でも、「関係づくり」を効果的に高めていく必要があり、両者の関連を捉え直す必要が生じた。

そこで、１年次の成果と課題を踏まえ、２年次では、「関係づくり」と「動きづくり」を分けて考えずに、「動きづくりの運動」も、集団の中で取り組む「関係づくりの運動」として捉え、更なる授業研究に取り組んできた。



３　授業の概要

＜２年体育科授業について＞
①授業者：桑原　和馬・島田　紀子・田村　千秋
②単元名：「探して！広げて！レインボー変身ランド～表現遊び～」
③概　要：

本単元では、楽しく表現遊びをする中で、「自分や友達の動きを振り返って、工夫を共有すること」を主眼に置き、動物やおもちゃになりきる活動（変身ゲーム）を構想した。その手立てとして、

導入では、心と体をほぐすゲームを取り入れたり、「変身したい」と思わせる場を設定したりした。また、教師が表現した動きを子どもが「オノマトペ」で答える変身ゲームを　取り入れたり、変身ゲームの中で動きのポイントを示したりした。そして、単元の終末では縦割り班のメンバーで簡単な話を作って表現遊びをするという魅力的なゴールを設定した。

本時（第３時）では、「速い⇔遅い」の変化に気を付けて変身遊びを楽しむ活動を行った。ロボットやペンギンなどの題材で、「歩く→スピードアップ→壊れる」といった変化を与えながら、変身遊びを展開した。指導者が、意図的に子どもの面白い動きを取り上げ、その意図を聞いたり、模倣を促したりしたことで子どもたちは、どんどん題材のものになりきり、変身遊びに夢中になっていく姿が見られた。ＴＴ指導の成果もあり、一人一人の見取りをより多くの目で行い、子どもによさをフィードバックできたことも効果的であった。

展開の後半では、縦割り班のグループを分けて互いの動きを見合ってよいところやアドバイスを伝える活動も取り入れた。その結果、仲間の動きのよさが「みんなの言葉」として表出された。この活動により、「自分の動きを面白いと言ってもらえてすごく嬉しかった」など、子どもたちは自分の表現に自信をもち、より楽しむ姿が振り返りの文章にも表れていた。

単元終末の「お話作り」の表現遊びでは、各縦割り班でのグループがこれまでの変身ゲームをベースに、今まで変身したことのない題材も取り入れながら、思い思いのものに変身し、ストーリーを楽しむ姿が見られた。

４　研究の成果

指導者の日本大学 鈴木 理教授からは、次の５点をご指導いただいた。

・体育授業をめぐる「問い」の立て方自体を転換すること。つまり、「（教師は）問題を解決できたのか」から「何を問題として見立てたのか」へと目線を向け直すことが必要である。
・授業の現実は絶えず「つくり出される（構成される）もの」であって、一定の時間・空間の中で完結するものではない。授業では、計画した活動が正しく実施されたかどうかではなく、「知っている（分かった）つもり」が突き崩されていく教師と子どもの実践を注視し、新たな「気づき」が形づくられる過程を見取ることが主題となる。
・授業で生じる現象はすべて解釈の対象である。教師や子どもの判断や行為の「正解・不正解」を追及するのではなく、その出来事自体が授業全体の中で重要なメッセージを発信していると考え、出来事の意味を読み取っていく必要がある。
・授業研究の対象は、教材それ自体ではなく、教材を介して立ち現れる授業のリアリティそのものである。
・全ての児童が「学級（体育授業）＝学びのコミュニティ（共同体）」の重要なメンバーであることを相互に承認しながら「有意味な参加」を果たしていくことが大切である。

鈴木教授のご指導により、当校の研究が一定の成果と効果を上げたこと、研究の方向性が「共生」を掲げる当校の理念に沿ったものであったことを確認した。一方、子どもの技能の伸びや思考の変化等、一人一人の見取りをどう行っていくかという点は、今後も追究していく必要がある。今後は、限られた時間と人数の中でより効率的に個々を見取る方法について模索していく。

５　その他

研究の詳細（研究発表会の要項、指導案等）は新潟県教育支援システム（Tea Room）にて公開。